あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール 情報誌

THE PHOENIX HALL

Salon

Vol.116 2018年9月 秋号

ホール3F 壁画 ポール・ギアマン作「クインテット」

CONTENTS

01 Prime Interview ── アルタン
03 Phoenix Presents ── 今井信子presents フォーク・ソングス〜ハンガリアン・スケッチ〜 アンサンブル九条山セレクションズ
05 Pick Up
07 Essay de say ──「木琴奏者」の条件 通崎睦美

あいおいニッセイ同和損保

ケルト音楽の至宝、ザ・フェニックスホールに初登場！
アルタン

「アイルランド伝統音楽の最高峰 アルタン」は、2018年12月5日（水）午後7時開演。入場料は、一般5,000円（友の会4,500円）、学生1,500円（限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い）。チケットのお求め、お問い合わせは同センター（電話06・6363・7999 土・日・祝を除く平日10時〜17時）。
<プログラム>　ドゥラマン、ジェイ・ディーズ・リール、ジプシー・デイヴィー、ドニゴール・ハイランド・セット、ギャップ・オブ・ドリームス、ザ・マンス・オブ・ジャニュアリー　ほか（予定）

英国のお隣の島国アイルランドでは、伝統音楽が今も現代に生きる音楽として息づく。90年代以降、世界的に人気が広まり、日本でも多くの人たちに愛されるようになったアイリッシュ・ミュージック。その代表格として誰もが認めるバンドが、アルタンだ。その看板は歌手でフィドル（ヴァイオリン）奏者のマレード・ニ・ウィニー。ピュアな美しさを持つ声で歌われる伝統歌にはどこか懐かしさを覚えるし、フィドルが先導する躍動感溢れるチューン（インスト曲）では思わず足を踏み鳴らしてしまう。その2本立ての魅力は待望のニュー・アルバム「ザ・ギャップ・オブ・ドリームズ」でも変わらない。現在のアルタンは、マレード、マーティン・トゥーリッシュ（ピアノ・アコーディオン）、キーラン・クラン（ブズーキ）、マーク・ケリーとダヒー・スプロール（ギター）の5人だ。（ギタリストはツアー先によって交替で参加。）去る3月のアイルランドの祝日セント・パトリック・デイの週に行われたニューヨーク公演の開演前にマレードに話を聞いた。　（取材・文：五十嵐 正／音楽評論家）

アルタン（Altan／アイルランド伝統音楽集団）
アイルランドの北部ドニゴール地方出身、現在のケルト音楽シーンにおいて名実ともに最高峰のグループ。フィドルを中心とした躍動感溢れるダンス・チューンと、マレードの天使のような透き通ったヴォーカル曲が魅力。デビュー以来、ドニゴールの伝統音楽を純粋で素朴過ぎるほど正攻法に表現し、世界中を魅了してきた。そのピュアなサウンドは、80年代後半の停滞していたアイルランド音楽シーンに新鮮な衝撃を与え、現在に至るシーンの盛り上がりの起爆剤となる。バンド名はアイルランドの中で最も ケルト色が強く残る地域ドニゴール州にある湖の名に由来する。アルバム『アイランド・エンジェル』（1993）でバンドは不動の地位を築く。1996年にメジャー・レーベルのヴァージンと契約。1997 年に初来日を果たした後、定期的に来日公演を成功させている。これまでに10枚以上のオリジナルアルバムを発表。最新作は「The Gap of Dreams」（2018）。

■アルタン最新アルバム
『ザ・ギャップ・オブ・ドリームス』
本作は、ドニゴールのバンドという本来の立ち位置に戻り、ほぼメンバーのみで作られたアルバム。力強く、素朴で美しい、アルタンの真の姿がここにある（VIVO-467）。

伝統音楽を演奏しても、私たちは今を生きる現代のミュージシャン

アルタンは北西部のドニゴール州の出身。アイルランド本来の言語ゲール語が話され、フィドル演奏が盛んという伝統文化が色濃く残る地域である。80年代初めにマレードが最初の夫で94年に癌で他界したフランキー・ケネディ（フルート）とのデュオで活動を始めたのがバンドの出発点で、「自分が最も良く知っている、自分を最もうまく表現できるものにこだわることを常に意識していた」と振り返るように、最初から地元の伝統にこだわり続けた。彼らが演奏するドニゴール産のチューンは、首都ダブリンの人びとを驚かせ、興奮させたという。「私たちがささやかな火花をもたらし、人びとは地域的な音楽スタイルに再び焦点を絞るようになったの」と、アイリッシュ・ミュージックの流れに大きな影響を与える存在となったのだ。

それからの彼らはドニゴールの伝統に強くこだわりつつも、英国のロック・レーベル、ヴァージンと契約するなど、広い間口で多様なファンを獲得してきた。近年のアルバムを振り返っても、05年の『ローカル・グラウンド』、10年のオーケストラとの共演作『アルタン with RTE コンサート・オーケストラ』、12年の『ポイズン・グレン』、ナッシュヴィルで米国の名奏者たちと共演した前作『ザ・ワイドニング・ジャイル〜広がる螺旋』と、地元の伝統に根ざす作品とその枠を超えて冒険する作品を交互に発表している。

「ザ・ギャップ・オブ・ドリームズ」は地元のスタジオで録音したドニゴールのバンドという本来の立ち位置に戻ったアルバムです。あなたたちは折に触れてルーツを再訪して確認する必要があるんですね。

「私たちはドニゴールに戻らなくちゃならない（笑）。「源泉」に戻らなきゃいけないの。私たちにはとても重要なことね。実験的なことをやったり、コラボレーションをやったりするのは素晴らしいことよ。それは私たちが何者であるかの一部でもあるしね。コラボも大好き。でも、今回はすごくシンプルにしようと言った。ゲストはなしでね。だから、とても私的で、とてもシンプルなアルバムになった。長い間やりたかったものになったわ」

シンプルといっても、幾つかの発見があります。「ツイン・フィドル」の相方だったキーラン・トゥーリッシュの脱退で、ギターとブズーキの存在感が増しました。その繊細な伴奏がアルタンの音楽に豊かな色彩を与えているとこれまで以上にわかります。

「ええ。彼らの持ち込んだ味つけのおかげで、いろんな色彩を見せていると思う。マークの美しい演奏にとても刺激された曲もあった。出来上がったアルバムを聴くと、これまでと異なる色と影をたくさん見つけられるわ」

新しい作品に取り組むとき、どういったところにインスピレーションを求めます？

「伝統音楽をやっていても、私たちは今を生きる現代のミュージシャンだから、あらゆる音楽に耳を傾ける。デヴィッド・ボウイとか、ああいった人たちだって私に影響を与えている。彼らの音楽を演奏はしないけど、それらも人生の一部なの。それが異なった形で持ち込まれているわ。そして、時にはちょっと実験的にもなるし、即興はたくさんやる。それまでやっていないことを試みる。だから、どんな古い曲も現代のものとして歌えると感じている。新作は私たちの音楽を新たな段階に進めたと思う」

伝統を伝えていくことに関してですが、コンサートで必ず誰から学んだかを丁寧に話しますよね。歌の物語の解説はもちろん、インストのチューンも出所を明らかにします。

「すべてのチューンには物語があるの。その背後にある物語を知らなければならない。どこから来たのか。祖父から学んだ？それとも母から？私たちはメロディーだけを受け継ぐんじゃない。その曲を弾いていた人の人柄や品性も。すべてはその人間性と関係するからよ」

今の若者たちはインターネットでもたくさんの過去の音源や映像にアクセスして曲を学べますが、それだけでは充分じゃない？

「私が彼らに教えることは、音楽がどこからきたのか、何についてなのかなの。私は（伝説的なフィドラーの）ジョン・ドハティやコン・キャシディを知っていた。彼らの人柄や物語を伝えていくことは、やらなくちゃいけないことの一部だと感じる。だって、これらのチューンは空気から生まれたんじゃない。人から伝えられたもので、そこにはその人柄が確かに反映している。その人生ゆえの音楽で、それを伝えていこうという感覚があった。彼らの寛大さとその気質が感じられるの。

私にとっての伝統的なアイリッシュ・ミュージックとは、そこに聞こえている音だけじゃなくって、人とその生い立ちと歴史と愛情と寛大さと…すべてが関係しているものなの。それはコンピューターからは学べない。誰だって何でも機械的に学ぶことができるけど、それは人を感動させないわ。その音符を演奏するだけじゃ、私を感動させない。感情を与えてくれないから。そういった演奏に興味はないし、感動は受けない。世界一のテクニシャンが演奏してもね」

演奏するのは音符だけではない、と。

「音符だけを演奏なんてできないわ。何の意味もない。私は演奏に自分自身を300%こめている。私の演奏は完璧じゃないかもしれないけど、300%をこめようとしているの（笑）。舞台に立つ私はエンタテイナーでもあるわけだけど、何よりもこの音楽が何についてのものかを伝えたいの。ただの音符じゃなくって、感情であり、喜びや悲しみ、すべてがこめられているのよ」

それでは、年末の来日公演でも300%で演奏してくれますね？

「もちろんよ！」

その来日公演についての抱負を。

「日本に戻れることをすごく楽しみにしているわ。日本の人たちはアイリッシュ・ミュージックを本当によくわかってくれている。どうしてかしらといつも考えているんだけどね。高いビルが建ち並び、すべてがとてもモダンな社会なのに、神秘的なものを求める強い気持ちがあるように感じるの」

キーラン脱退後、ツアーによってはゲスト奏者を迎えていますが、日本公演はどうなりますか？

「このまま（4人編成）で行くべきと思うわ。（後任を加えない）今の私たちが私たちという意識的な決断をしたのだから。（やはり4人編成だった）バンドを始めた頃と同じだからか、もっと気楽にも感じているし。私たちがとても楽しんで演奏していることが聞き取れると思う。人生は変わっていくし、それを直視して受け入れなくちゃならないの」

4人での演奏を楽しんでいるんですね？

「とてもね。空間があるから。もっと創造的な自由を与えてくれる空間があるの」

■アンサンブル・ア・ラ・カルト62

2019年3月2日(土)

15:00開演　指定席
一般￥4,000(友の会価格￥3,600)
学生￥1,000(限定数)

出演　今井信子(ヴィオラ)
ミハーリ・シポス(ヴァイオリン)
マールタ・グヤーシュ(ピアノ)

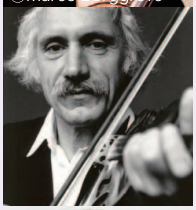
ハンガリーの民俗音楽、そしてバルトークの真髄に迫る旅
今井信子presents
フォーク・ソングス〜ハンガリアン・スケッチ〜

曲目　バルトーク:ルーマニア民族舞曲 Sz.56
コダーイ:アダージョ
バルトーク:44の二重奏曲 Sz.98より
ブラームス:ヴィオラソナタ 第1番 ヘ短調 作品120-1　ほか(予定)

私は音楽に内在する「歌」に強く惹かれます。そしてその「歌」の原泉は民謡など民俗音楽にあると思います。ハンガリーの民俗音楽に造詣の深いミハーリ・シポスさんとはバルトークを研究する過程で知り合い、彼の御蔭で私はバルトークの解釈が大きく変わりました。彼はまるで語るようにヴァイオリンを弾き、先祖から受け継いだ様々な「歌」が自然に溢れてくるような人です。マールタ・グヤーシュさんはまさに音楽のために生きているような人。音楽への奉仕という精神すら通り超えて、天命という言葉が相応しい人です。同じくハンガリー出身である彼女のなかにも豊かな音楽が流れている事を感じます。そのような二人といつか一緒に音楽をやりたいと思っていました。シポスさんとグヤーシュさんは実は今回が初共演。それが大阪で実現するのはまるで夢のような話で、今からとても楽しみにしています。　(今井信子/ヴィオラ奏者、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザー)

©Marco Borggreve

今井信子(いまい・のぶこ/ヴィオラ)　桐朋学園大学卒業。イェール大学大学院、ジュリアード音楽院を経て、1967年ミュンヘン、68年ジュネーヴ両国際コンクールで最高位入賞。70年西ドイツ音楽功労賞受賞。ベルリン・フィル定期や小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラとのザルツブルク音楽祭出演など、世界の桧舞台で活躍を続けている。マルボロ、ラヴィニア、ヴェルビエなど世界各地の音楽祭にも頻繁に招かれている。2003年にはミケランジェロ弦楽四重奏団を結成、カルテットのメンバーとしても積極的な活動を展開している。日本では、1987年より東京カザルスホールの音楽アドヴァイザーを務めたほか、<カザルスホール・アンサンブル>、<ヴィオラスペース>などの企画・演奏に携わる。2011年4月よりあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザー。フィリップス、BIS、グラモフォンなどから40以上のCDをリリース。これまでにエイボン女性芸術賞、文化庁芸術選奨文部大臣賞、京都音楽賞、モービル音楽賞、毎日芸術賞、サントリー音楽賞を受賞。紫綬褒章、旭日小綬章受章。アムステルダム音楽院、クロンベルク・アカデミー、ソフィア王妃高等音楽院名教授。上野学園大学特任教授。北京中央音楽院客員教授。スイス在住。



ミハーリ・シポス(Mihaly Sipos/ヴァイオリン)　1948年ブダペスト生まれ。羊飼いの祖先をもつ父、羊飼いの古い民謡、ダンスに精通した祖母を持ち、母方の祖父は偉大な歌手でありクラシック音楽の愛好家であった。またシポスの母親はリスト音楽院でピアノを学んでおり、ミハーリは音楽に溢れた環境の中で育った。コダーイにより設立された有名音楽学校に入学し、7歳でヴァイオリンを始める。その後11年間クラシックのヴァイオリンを学んだ。1972年より伝統音楽に取り組むようになり、1973年には友人のDaniel Hamar、Sandor Csooriと共にムジカーシュを設立、同アンサンブルのリーダーをつとめている。またムジカーシュではヴァイオリンのほかにツィターも演奏している。ムジカーシュのコンサートやレコーディングでは音楽監督を務め、ゲスト出演するクラシック音楽の奏者とのコーディネーターもつとめている。

マールタ・グヤーシュ(Márta Gulyás/ピアノ)　ハンガリー出身。5歳からピアノを始める。ブダペスト・リスト音楽院でラントッシュ・イシュトバーンに師事。卒業後モスクワ音楽院でドミトリー・バシュキロフのもと更なる研鑽を積む。ドビュッシュー・ピアノ国際コンクール第3位、レオ・ワイナー国際室内楽コンクール第1位、ハンガリー・ラジオ・ピアノ国際コンクール第3位など数々のコンクールに入賞している。「ハンガリーの文化」賞、スペイン・ソフィア王妃名誉勲章、レオ・ワイナー・メモリアル賞ほか受賞多数。演奏活動の傍ら後進の指導にも熱心に取り組み、現在リスト音楽院(ブダペスト)室内学科准教授、ソフィア王妃音楽院(マドリード)ピアノ科・室内楽科教授、国際室内楽研究所(マドリード)室内楽・ピアノ_教授をつとめている。ハンガリー・ベーケシュチャバ音楽祭芸術監督。

ホール主催・共催・協賛・協力公演チケットのお申込み方法

06-6363-7999
土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約
・ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
・主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
・友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約
・E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
・事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

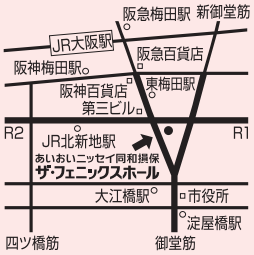
■一般発売
・一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

http://phoenixhall.jp/
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約 (主催公演のみ)
・ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
・チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
・ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
・学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
・チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店によるお申込み

・ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物8階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法
下記①または②のどちらかとなります。

①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。
営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00です。
②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座　00940-0-95351　　加入者名　ザ・フェニックスホール

9月21日(金)
10:00 受付開始
ザ・フェニックスホール
友の会優先予約

9月25日(火)
10:00 受付開始
イー・フェニックス
E-PHX優先予約

9月26日(水)
10:00
一般発売

インターネット予約、ご来店による
お申込みは**9月27日(木)10:00**から!

★5月1日(火)よりホールチケットセンターはビル8階へ移転しました。

■フェニックス・エヴォリューションシリーズ87　　主催　アンサンブル九条山

2019年2月16日(土)

16:00開演　自由席
一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700)
一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150)
学生前売¥2,000　学生当日¥2,500
※友の会割引は無制限。
※学生券は大学生以下対象。

アンサンブル九条山セレクションズ

出演　アンサンブル九条山／若林かをり(フルート)、上田希(クラリネット)、石上真由子(ヴァイオリン)、福富祥子(チェロ)、太田真紀(ソプラノ)、畑中明香(打楽器)、森本ゆり(ピアノ)

曲目　ブーレーズ:漂流
ジャン=リュック・エルヴェ:飛行の夢Ⅰ
トリスタン・ミュライユ:沈みゆく太陽の13の色
イヴ・ショリス:トリオ、De l'une à l'autre
ジョルジュ・アペルギス:7つの愛の罪

京都での創立以来、多くの作曲家とともに新しい作品を創り上げ、上演を重ねてきたアンサンブル九条山。プログラムは現代音楽史に残る名作から、アンサンブルと縁の深いヴィラ九条山レジデント作曲家達の作品、演奏と身体性の関係性に気付きをもたらすシアターピースまで、フランス現代音楽の様相を俯瞰するアンサンブル九条山のレパートリー作品集。20世紀後半を代表する作曲家・ブーレーズの緻密な書式による透明感に溢れた響きの世界を。スペクトル楽派の流れを汲むエルヴェの、フレーズと句読点における研究を書式に転用した、ユニークな視点を。若手ながら、独自の美意識に貫かれた静と動のコントラストが印象的なショリス作品を。テアトル・ミュジカルの担い手でもあるアペルギス作品では、演劇と音楽の狭間を。作品の本質に迫る演奏で、現代音楽の多様性を鮮やかに描き出します。
各々がソリストとしても力のあるメンバーで結成された精鋭集団・アンサンブル九条山のレパートリーから厳選した必聴プログラム!

アンサンブル九条山(あんさんぶるくじょうやま／現代音楽アンサンブル)
2010年、京都のヴィラ九条山(1992年創立。アンスティチュ・フランセ日本がパリ本部と連携して運営に当たるフランスの国外施設で、アジアでは唯一のアーティスト・イン・レジデンス)に滞在していた作曲家ヴァレリオ・サニカンドロにより結成された現代音楽アンサンブル。ヴィラ九条山の作曲家との協働により作品の世界初演を行うほか、ニュイ・ブランシュKYOTOなどへの出演を経て、2015年より演奏家主導の活動を開始。国内外でキャリアを積み、ソリストとしても広く活動する現代音楽のスペシャリスト達で構成されている。

フェニックス・エヴォリューション・シリーズ審査結果のお知らせ
2019年5月から2020年2月までの4公演が決定!

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社が芸術文化支援活動の拠点として設置、運営している音楽ホールです。優れたアーティストによる自主企画公演を開催する一方で、発表の機会を探っておられるアーティストの方々に呼び掛け、個性溢れる公演にこのホールを活用いただくことも重要な事業と位置付けています。「フェニックス・エヴォリューション・シリーズ」は、プロ・アマを問わず、音楽を愛するみなさまから公演の企画を募り、審査を経て選ばれた方々にホールと付帯施設を無料で提供しています。今回で募集は23回目となりました。2019年5月から2020年2月までの4公演の枠に、国内外から31編のご応募をいただきました。去る7月21日に選考検討会を開催し、識者の方々のご意見を伺ったあと、さらにホールで選考を進めた結果、4編の企画を入選といたしました。

■本年の選考アドヴァイザー(五十音順)　逢坂聖也様(音楽ライター)　佐藤直子様(読売新聞大阪本社文化部記者)　谷辺晃子様(朝日新聞社福岡本部社会グループ記者)　西村 理様(大阪音楽大学准教授)　福本 健様(音楽評論家)

2019年5月18日(土)
中谷政文 ピアノリサイタル ～エクレクティシズム～
■出演　中谷政文(ピアノ)■曲目　ラフマニノフ:ピアノソナタ 第1番 ニ短調 作品28、ストラヴィンスキー(アゴスティ編):バレエ組曲「火の鳥」 ほか

2019年8月7日(水)
音坊主～メシアンへと続く道～大阪公演
La Voie tracee par Oliver Messiaen
■出演　蓑田真理(ヴァイオリン)、中 実穂(チェロ)、西川智也(クラリネット)、松尾久美(ピアノ)■曲目　ドビュッシー:前奏曲集第1集より「帆」、メシアン:世の終わりのための四重奏曲　ほか

2019年11月13日(水)
古瀬まきを ソプラノリサイタル ～La voix humaine～
■出演　古瀬まきを(ソプラノ)、遠藤玲子(ピアノ)、藤野明子(字幕)■曲目　プーランク:偽りの婚約、オペラ「人間の声」　ほか

2020年2月15日(土)
會田瑞樹 ヴィブラフォン ソロリサイタル in OSAKA
■出演　會田瑞樹(ヴィブラフォン、打楽器)
■曲目　薮田翔一:Billow2
木下正道:海の手3　ほか

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。
当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演

KCM Concert at The Phoenix Hall, Osaka
“ロマンティシズムに底流する古典美への畏敬” ピアノ：野村幸代

主催　コジマ・コンサートマネジメント

発売中

2018年10月16日(火)　19:00開演　指定席　一般前売・当日￥4,000（友の会価格￥3,600）　※友の会割引は前売のみ

出演　野村幸代（ピアノ）

曲目　J・S・バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV826
リスト：3つの演奏会用練習曲 S.144 R.5
バッハのカンタータ「泣き、嘆き、悲しみ、おののき」と口短調ミサ曲の「十字架にかけられ」の通奏低音による変奏曲
シューマン：ピアノソナタ 第3番 ヘ短調 作品14（管弦楽のない協奏曲）

野村幸代（ピアノ）が奏でる“ロマンティシズムに底流する古典美への畏敬”。1991年マリア・カナルス国際音楽コンクールでメダル受賞。1995年ウィルヘルム・ケンプ生誕100周年記念国際ピアノコンクール オルフェオ・グランプリを受賞。2013年度 音楽クリティック・クラブ奨励賞受賞。

協賛公演

KCM Concert at The Phoenix Hall, Osaka
“ストリング・狂(マニア)！”～戸田弥生 ソロ・ヴァイオリン・リサイタル～

主催　コジマ・コンサートマネジメント

発売中

2018年11月21日（水）　19:00開演　指定席　一般前売・当日￥4,000（友の会価格￥3,600）　※友の会割引は前売のみ

出演　戸田弥生（ヴァイオリン）
曲目　レーガー：前奏曲 作品117-6
イザイ：無伴奏ヴァイオリンソナタ 第6番
ストラヴィンスキー：エレジー
一柳 慧：展望（ヴァイオリン・ソロのための）
J・S・バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番 BWV1006より「プレリュード」 ほか

ヴァイオリン、弦楽器の素晴らしさを本当に味わうためには、弦楽器だけがよいと常々私は思っています。タイトルのマニアという言葉は、辞書には「普段から自己の得意とする専門分野に没頭する生活習慣を持つ人物」とあり、音楽に没頭するときはまさに私自身の姿でもあります。ストリングとしたのは、私のソロをきっかけに、ヴァイオリン以外の弦楽器にも興味を広げていただきたいという願いも込めています。少し堅苦しいと思われるかもしれないヴァイオリンのみによるコンサートで、お客様にも没頭いただける、「好き」な部分を発見いただければこれに勝るよろこびはありません。　戸田弥生

協賛公演

《冬のチェンバロ音楽祭2018》コントラバス讃歌 ―コントラバス四重奏団―

主催　冬のチェンバロの会

9/28(金) 発売

2018年12月9日(日)　14:00開演　自由席
一般前売・当日￥4,000（友の会価格￥3,600）　学生＆25歳以下前売・当日￥2,500　※友の会割引は1会員2枚まで（前売のみ、限定数）

出演　吉田 秀、黒川冬貴、村田和幸、瀬 泰幸
（以上コントラバス）
曲目　ビゼー（文屋充徳 編）：カルメン組曲
M・ワインベルク：無伴奏ソナタより第1、4楽章
B・ロンベルグ：二重奏ソナタ 作品43-1
D・アンダーソン：7つのデュエットより
J・S・バッハ：シャコンヌ　ほか

関西出身の東西のコントラバスの名手4人が集結。それぞれが独奏、東西チームに分かれてのデュエット、そしてもちろんカルテット！という多彩なプログラムで楽しんで頂きます。普段オーケストラでは他の楽器どうしの音を溶けあわせ、下から支え、まとめ、包み込む音色を創りだしているコントラバス。首席奏者はもう一人のコンサート・マスターともいわれますが、他の楽器と交えない演奏を聴く機会はあまりありません。個性豊かな、ちょっと不思議な音の世界に身を置いてみませんか。12月の街にコントラバスはよく似合うのです。

協賛公演

東 誠三　ピアノリサイタル

主催　オランジュの会

9/13(木) 発売

2018年12月16日(日)　14:00開演　自由席
一般前売￥4,000（友の会価格￥3,600）　一般当日￥4,500（友の会価格￥4,050）　※友の会割引は1会員2枚まで

出演　東 誠三（ピアノ）

曲目　ベートーヴェン：ピアノソナタ 第8番 ハ短調「悲愴」作品13
ピアノソナタ 第23番 ヘ短調「熱情」作品57
シューベルト：4つの即興曲　作品142 D935

東誠三の大阪での年末コンサートは今回が10回目で最後となる。東ほど真摯に楽譜と向き合い、余計な解釈を排して感動的な音楽を聴かせるピアニストは希有である。それだけにピアノを学ぶ人々にとって曲の最高峰を示す東京藝大教授の東の演奏を大阪で直に聴く最後の機会は外せない。最終年に相応しくベートーヴェンの「悲愴」と「熱情」シューベルトの4つの即興曲D935という超豪華なプログラムを演奏するが、記念碑的な名演奏となるであろう。

協力公演

関西音楽人クラブNPO法人化記念 チャリティコンサート2018

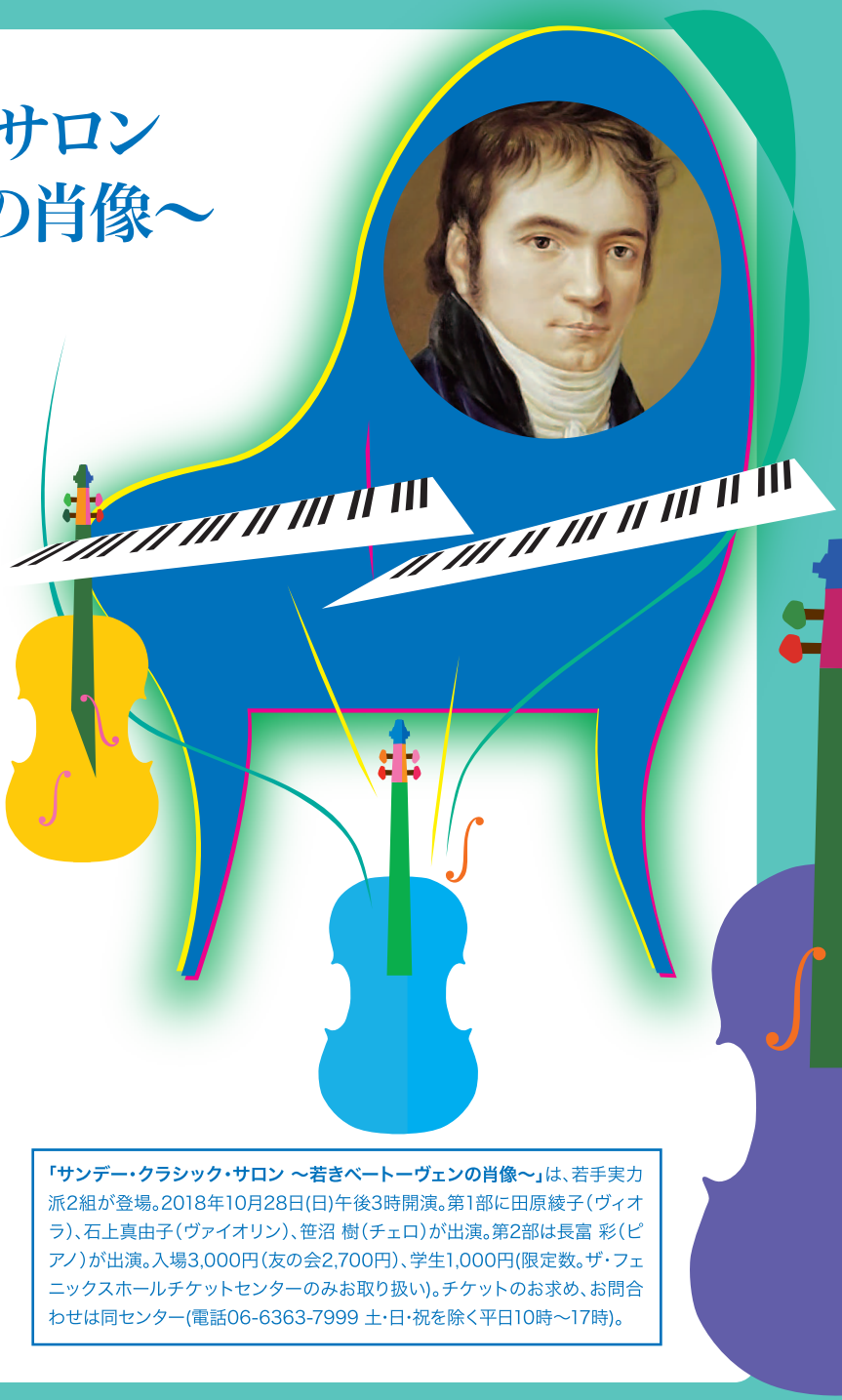
発売中

2018年10月14日(日)　15:00開演　自由席　一般前売・当日￥3,500（友の会価格￥3,150）　主催　特定非営利活動法人関西音楽人クラブ

出演　田村映子＆前田峰子(ピアノ連弾)、岡田沙弥、今岡淑子、加藤理彩子(以上ピアノ)、
吉岡美恵子(フルート)、杉山雄一(ヴィオラ) 福井麻衣(ハープ)、篠原猛浩（クラリネット）、佐野智子(ヴァイオリン)

曲目　ドビュッシー：小組曲、ベルガマスク組曲、夢、ノクターン、喜びの島、
フルート・ヴィオラとハープのためのソナタ、第1狂詩曲、ヴァイオリンとピアノのためのソナタ

サンデー・クラシック・サロン ～若きベートーヴェンの肖像～



このコンサートは、ベートーヴェンが若い時に作曲した曲を、現代の若き演奏家に演奏していただこうというものです。主旨は2つあり、ひとつは若い時のベートーヴェン、いわゆる初期に分類される作品をまとめて聞いて頂こうというもの。もうひとつは、その作品を現代の若い演奏家がどのように解釈し、演奏するのかを楽しんでいただきたいというものです。

ベートーヴェンは1770年に生まれ1827年56歳でその生涯を閉じるまで138の番号付きの作品を残しました。ヨーロッパでは1789年にフランス革命が起き、時代が大きく変革した時期でした。革命思想に大きく影響を受けた若きベートーヴェンは、それが生涯にわたり自身の作品に色濃く反映されることになります。

特に初期作品は古典様式を踏襲しながらも新しい様式を模索するなど、非常に野心的な作風となっており、ベートーヴェンらしさが随所に感じられます。また、メロディやハーモニーが非常に明快で、とても親しみやすい作品が数多く遺されています。今回演奏する作品13のピアノソナタ 第8番「悲愴」も初期を代表する作品のひとつであり、ベートーヴェンの瑞々しさを存分に楽しんでいただけると思います。

また、今回は演奏家がどのように演奏に取り組むのかを、演奏前にインタビュアーを交えて話していただく予定です。インタビュアーとして新進気鋭の音楽家、小室敬幸氏を迎え、同世代の演奏家がどのように作品にアプローチするのかを明らかにしていただきます。

若き時代のベートーヴェンの作品を現代の視点で新たに切り込んでみようというこの企画、きっと皆様にとっても普段とは少し違う新しい感覚でコンサートを楽しんでいただけると思います。ご来場、お待ちしております。

「サンデー・クラシック・サロン ～若きベートーヴェンの肖像～」は、若手実力派2組が登場。2018年10月28日(日)午後3時開演。第1部に田原綾子(ヴィオラ)、石上真由子(ヴァイオリン)、笹沼 樹(チェロ)が出演。第2部は長富 彩(ピアノ)が出演。入場3,000円(友の会2,700円)、学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時～17時)。

チケットセンターリニューアルオープン アンケートお礼とご報告

チケットセンターリニューアルオープン アンケートにご協力くださいまして誠にありがとうございます。今回は5/1～6/30までの間チケットセンターに来店された方を対象とし、新チケットセンターの印象、設備(チケットセンター入り口、椅子のすわり心地)などについてアンケートにお答えいただきました。ご意見の一部をご紹介いたします。

◆ チケットセンターの印象 … 明るい、高級感がある。

◆ 設備 … エレベーターを降りたあとの自動ドアがわかりにくい。イスが重たい。ホテルのように高級感がある。

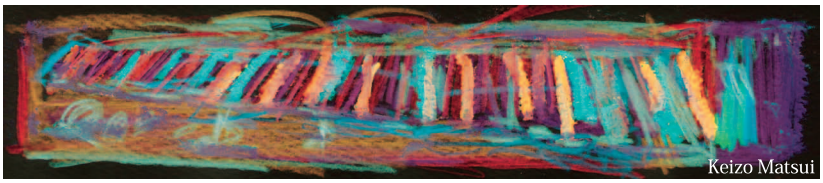
また、アンケートにお答えいただきました方々の中から抽選で3組6名様に、本年度主催公演(ホール指定)のご招待状をプレゼントする限定特典の当選者は以下の方々です。

■プレゼント当選者■　神戸市／久保様　門真市／中道様　岸和田市／原様

たくさんのお客さまより忌憚のないご意見を賜ることができ、ホールスタッフ一同、感謝いたしております。いただきましたご意見を参考に、より快適なチケットセンターを目指してまいりますので、今後とも変わらぬご愛顧くださいますよう重ねてお願い申し上げます。

「木琴奏者」の条件

— 通崎睦美



往年の名木琴奏者・平岡養一（1907-1981）の愛器「ディーガン・アーティスト・スペシャル・ザイロフォンNo.266」（1935年シカゴ製、1962年改造）を譲り受けて木琴を弾くようになり、13年目を迎える。このほど、4半世紀使ってきた「マリンバ奏者」の肩書きを「木琴奏者」に変えた。当初は、マリンバと木琴をいったりきたりしていたので、肩書きも両者を併記することが多かった。しかし、最近リサイタルの依頼を受ければ、必ず木琴を持って出かける。こうなれば、マリンバ奏者ではなく、さすがに木琴奏者だろう、と思いシンプルに「木琴奏者」と変更した次第だ。

木琴奏者というと、「立派なマリンバではなく、簡素な木琴。本当にそれでいいのですか」とでも言いたげに、ちょっと不思議そうな顔をされるのが面白い。時には、気の毒そうな顔をされる方もある。私が使っている楽器は、幅2メートル20センチ、6つにわけてケースに収めれば総重量100キロを超える大型の木琴。だから、決して気の毒に思ってもらうことはない。あるいは、私が京都に暮らしアンティーク着物のコレクションをしていることをご存じだと、単に古風な言い方をしているという解釈もされるようだ。

当初「木琴奏者、マリンバ奏者」と併記したのには、木琴とマリンバが歴史も音色も異なる楽器だとわかってもらいたいという気持ちもあった。木琴の上等なものがマリンバだと思っておられる方も多いからだ。

木琴は、ミヒャエル・プレトリウス(1571-1621)による世界最初の音楽事典『シンタグム・ムジクム』に図解されていることから、1500年代のヨーロッパに存在していたことがわかる。その後、少しずつかたちを変えながらヨーロッパに根付き、移民により北米にもたらされた。アフリカ由来、16世紀の奴隷貿易によって海を渡りラテン・アメリカ経由で北米にやってきたというマリンバとはルーツが異なる。音色の点でいえば、マリンバがアフリカ時代から共鳴器として瓢箪を付けるなど残響にこだわったのに対し、木琴は藁を束ねたレールの上に鍵盤を置くなど、からからと乾いた音色に徹した。両者共、20世紀の初頭アメリカで現代のスタイルになったが、各々の音色の特徴は活かされている。ちなみに、コンサート用の楽器には、両者ともホンジュラスのローズウッドが最適とされている。鍵盤の裏面の削り方によって音色を変えていることを付け加えておきたい。

さて、この「木琴奏者」という肩書き、わかりやすそうでわかりづらい。我々の業界で「打楽器奏者」と名乗れば、叩いて音の出る物、なんでも演奏しなければならない。そこには当然マリンバが含まれる。「マリンバ奏者」とは、基本的にはマリンバ一本で生きている人を指す。では、「木琴奏者」はどうか。

前述の平岡養一は「仮に世界で僕一人だけになっても、マリンバは弾きませんよ。あの楽器だけは、弾きません」という言葉を遺してこの世を去った。オーケストラと共演する際、木琴の音色は明るく軽やかにオーケストラを突き抜けるが、マリンバの音はまろやかでオーケストラの音色に溶け込み埋もれてしまう、というのがその理由の一つであった。平岡の没後、マリンバは開発が進み低音側に1オクターブ音域が広がるなど、当時とは違う魅力を持つ楽器になった。

現在まさしく世界で一人の木琴奏者になってしまった私は、8対2くらいの割合だが、マリンバも弾く。

そこで、改めて「木琴奏者」の条件を考えてみた。

もしかすると、一番大切なのは「木琴奏者です」と名乗って相手にきょとんとされても、決してひるまないことではないか。技術的な条件はさることながら、これが意外と難関かもしれない。

通崎睦美（つうざき・むつみ）／木琴奏者　1967年京都市生まれ。京都市立芸術大学大学院修了。2005年、東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会（指揮/井上道義）で、木琴の巨匠・平岡養一（1907-1981）が初演した紙恭輔『木琴協奏曲』を平岡氏の楽器で演奏したことがきっかけで、その木琴と600点にのぼる楽譜やマレットを譲り受けた。以後、演奏・執筆活動を通して、木琴の復権に注力している。『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』（講談社、2013）で、第24回吉田秀和賞、第36回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞。CDに『1935』『スパイと踊子』ほか。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー8F　TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月　2018年9月
発　　行　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編　　集　諸藤 修一
デザイン　松井桂三有限会社